

た。

腫瘍は肝外にも突出しており、悪性腫瘍と判断し肝右葉切除を施行した。肝芽腫分類では $T_2C_2V_0N_0M_0$, stage II。剖面は多結節性充実性で一部セラチン様物質や壊死物質を含む嚢胞形成を認めた。肝未分化肉腫の病理診断を得て、日本小児肝癌スタディグループの J・PLT91B2 に準じ CDDP と ADR の併用療法を6クルールの予定で開始した。術直後ではあるが再発の徴候無く順調な経過である。

24) 郡山における小児外科

大沢 義弘 (太田西ノ内病院
小児外科)

福島県の人口は約212万人であり新潟県より30万人程少ない。小児外科の主たる診療施設は本院を含め3院で、新生児外科症例はこれらに集中している。

本院における94年度の手術件数は352件(前年比13件増)で、うちソケイヘルニアは196件(同22件減)を占めた。一方、新生児外科症例数は16例で過去3年間の各9例より増加していた。これは郡山市の年平均出生数(約2,000人)から推計される新生児外科症例数、約4例をはるかに越える数値であった。

新生児外科疾患の主なもの、食道閉鎖症(3例)、横隔膜ヘルニア(2例)、幽門狭窄症(3例)、小腸閉鎖症(3例)などであった。

25) 食道癌手術後患者のサイトカインと代謝指標の変動

小山 諭・親松 学
香山 誠司・大川 彰
林 光弘・小林 孝
佐藤 信昭・畠山 勝義 (新潟大学第一外科)
田宮 洋一 (同 手術部)
吉川 恵次 (同 救急部)

【目的】侵襲による炎症性サイトカインの変動を調べるため、食道癌患者術前後のサイトカインの推移を代謝変動とともに検討した。

【対象・方法】右開胸による一期的食道切除再建術を施行された食道癌患者14例を対象とし、血清 IL-6 濃度及び胸腔ドレーン排液中の TNF- α 、IL-1 β 、IL-6、エネルギー消費量(REE)と尿中総カテコラミン排泄量を術前後で測定し検定した。

【結果】術後3日間におけるドレーン排液中 TNF- α 値

と IL-1 β 値は感染合併症例で高値を示した。術後3日間におけるドレーン排液中の TNF- α 最高値と血清 IL-6 最高値との間に有意の相関を認めた。サイトカイン値の変動とエネルギー消費量や尿中総カテコラミン排泄量の変動との間に相関を認めなかった。

26) 再発甲状腺癌の治療成績

高部 和明・大谷 哲也
大谷 哲士・武藤 一朗 (秋田赤十字病院
外科)
高野 征雄

1969年1月より1994年12月までの25年間に当科で切除された甲状腺乳頭癌及び濾胞癌125例を対象とし、切除甲状腺癌の治療成績及び再発様式を検討した。

再発症例は28例(再発率22%)だった。再発形式は、リンパ節再発18例(64%)、遠隔転移12例(43%)、局所再発4例(14%)、甲状腺内再発5例(18%)だった。リンパ節再発例には全例摘除術を施行した。遠隔転移は肺転移例、骨転移4例、脳転移1例で、その内1例に肺切除術、1例に脳腫瘍切除術を施行した。全手術例の10年生存率は92.9%。再発例のそれは72.9%だった。

再発例中4例(86%)に外科的治療を適用し、19例(68%)は現在生存中なことから、外科的治療は有用と考えられた。

27) 悪性褐色細胞腫の1切除例

加藤 英雄・新國 恵也 (長岡中央総合病院)
吉川 時弘・佐々木公一 (外科)

【症例】25歳、男性。【現病歴】1994年4月頃より左季肋下に腫瘤を触知。11月人間ドックの胃透視にて胃体部の後方よりの圧排を指摘され、12月近医受診。腹部エコーにて後腹膜腫瘍を疑われ当院紹介となる。【現症】血圧160/100mmHg、3カ月に6kgの体重減少を認める以外異常なし。【検査成績】検血、生化学腫瘍マーカーに異常なし。【CT及びMRI】脾体尾部にかけ脾内部から前方に張り出す直径10cm大の嚢胞主体の多房分画性腫瘍を認めた。以上より脾の嚢胞性疾患を疑い手術を施行した。【手術】脾体尾部前面に被膜形成のある、小児頭大の腫瘤あり脾合併脾体尾部切除術にて切除し得た。左副腎は温存された。【病理組織】血管侵襲の認められる偽ロゼット形成型の悪性褐色細胞腫と診断された。以上、異所性悪性褐色細胞腫の1例を報告する。